

ゼロコロナ政策に揺れる中国（上海）

今年の 4～5 月の 2 カ月間のロックダウンを経験した上海では、夏以降に市中感染はポツポツ見られる程度であったが、11 月に入ってからは徐々に市中感染の発生が見られるようになった。2020 年 1 月末からの武漢市のロックダウン、今年の上海市のロックダウンを経験した中国では、経済への影響などから大規模な都市封鎖にはしないものの、オフィスビルやマンション、あるいは、小区と言われる居住エリアを限定で封鎖する措置は、全国で 2 万カ所とも 3 万カ所と言われている。日本で報道された 11 月末からの上海をはじめとする各地で発生したゼロコロナ対策に対するデモが天安門事件の再来のようになるのかということ、それは少々違うものであると考えている。

上海市内の規制状況

上海で利用されているスマホのアプリに健康码（ジエンカンマ）というものがある。中国全体では行程卡（シンチェンカ）というアプリもあり、これらは Alipay や WeChat と紐付けされており、さらに携帯電話番号、本人情報に結び付けられている。また、オフィスビル、ビル内の事務所、レストラン、コンビニなどのそれぞれが場所碼（チャンソーマ）という QR コードを申請して持っている。オフィスビルに入るには、そのビルの場所碼をスマホでスキャンすると、PCR 検査の陰性結果が出てから 24 時間、48 時間、72 時間以内という表示が出て来て、それをビルの保安担当者が入る時に確認して入館が認められる。もちろんこの表示を出すためには、オフィスビルや街角にある無料 PCR 検査場で検査を受けないとならず、最近では 48 時間以内の陰性証明を求める場所が多くなっているため、2 日に 1 回は検査を受ける必要がある。

その他にも感染者が発生した場合には、感染者が済んでいるマンションや小区が封鎖され、感染者は集中隔离でコロナ専門病院に陰性となるまで隔離となる。また、密接者（濃厚接触者）のいる住宅も 3 日間程度の封鎖となり、密接者のいる住宅では 3 日連続で PCR 検査を行い、陰性であることが証明されて出勤や買い物に行けることになる。



▲上海で利用される健康码（ジエンカンマ）

▲中国全土で利用される行程卡（シンチェンカ）

上海市外との往復が難しい

市外の行き先の省や都市によって規制に違いがあるので、筆者が市外に出た時の経験を記述する。江蘇省で開催の日中国交正常化 50 周年記念イベントなどに参加するため、上海総領事館、日系企業の方々と 9 月下旬に淮安市、10 月下旬に揚州市と二度ほど高铁（新幹線）を利用して江蘇省の都市を訪問した。まず、高铁の駅に入るには、48 時間以内の PCR 陰性証明が必要である。PCR 検査の結果は検査を受けてから数時間～10 時間程度かかるので、前日には検査を受ける必要がある。当日受けた検査結果が出ないために予約した高铁に乗れない事態も駅では時々見受けられる。

到着した先では、江蘇省は上海市とは異なる独自のアプリ（蘇康码）で管理しており、そのアプリをスマホにインストールするとともに、到着した駅を出る前に PCR 検査がある。ここでは過去 2 週間に訪問した省・都市が確認できる行程卡により、感染の発生した都市には行ってないことが確認される。PCR 検査結果が出るまで足止めされることはないが、どこのホテルに宿泊するかなどを事前にスマホで登録するなどの手続きもあり、かなり煩雑な作業であった。さらに、到着したホテルで PCR 検査が必要であり、上海で受けた PCR 検査結果は関係ないという状況であった。ホテル滞在中は毎日 PCR 検査を受けた。

江蘇省から上海に戻る際には、高铁の駅で蘇康码による 48 時間以内の PCR 陰性をチェックしないと駅に入らず、上海に到着すると改札出口で、今度は上海の健康码のチェックを受ける。1 泊 2 日で健康码における上海の陰性結果が 72 時間以内であれば、そのまま移動できるが 72 時間以上となっている場合には、駅の PCR 検査場で検査を受けないと駅の外に出られないことになる。



▲江蘇省揚州市大明寺訪問



▲江蘇省で利用される独自のアプリ（蘇康码）

中国の規制緩和と上海の新たな規制

11 月 11 日に国務院が発表した新型コロナウイルスの予防・抑制業務のさらなる最適化のための 20 条の措置を決定した。これを受け、上海市では 13 日に市政府として、これまで海外から中国に入ってくる人々の隔離措置を 7 + 3 日（集中隔离 + 健康観察）から 5 + 3 日にすることになり、また、高・中・低リスク地域を高・低リスクにすることなどが発表された。健康観察と言っても自宅のある小区の居住委員会が自宅に戻ることを認めないことが多く、実際にはこれまでも 10 日のホテル隔離であった。2 日間の短縮は朗報ではあるが、大きな変化はないところである。

また、11 月 24 日からは、上海市では上海に入ってきた人（上海居住者が市外から戻って来る場合を含む）は、5 日間はレストラン、スーパー、ショッピングモール、娯楽施設には出入りできないが、公共交通機関の利用やオフィスへの出勤は可能という措置が取られた。上海に戻って 5 日以内の場合には、スマホの健康码の画面

に赤い文字でそれが表示されることから、市外への出張や江蘇省のゴルフ場でのコンペが中止になるなど、大きな影響となっている。

商工クラブの活動

上記のとおり、省を跨ぐ移動については大変厳しい規制がある。また、政府組織が主催する会合は、感染対策によりほとんどがオンラインでの開催となり、9月に入ってようやくリアルでの会合開催も見られるようになった。しかしながら、会場に集まる人数は50人以内、開催日前の3日間はPCR検査を受けてスマホに陰性証明があること、また、開催2週間前から体温が正常であることを記録し、正常であることを誓約書として提出するなどの手続きがあった。また、会食があるイベントは非常に少なくなっていた。

一方、民間が主体となる講演会やセミナーでは、100人を超える人が集まる場合でも9月ごろからは開催可能となった。商工クラブでは、8月末に100人超でのゴルフコンペと懇親会の開催、また、厳しい移動手続きの中で9月上旬に広西チワン族自治区の南寧市にASEAN博覧会の視察団を派遣した。10月にもリアルでの講演会や交流会などを積極的に開催し、9月に開催できなかった日中国交正常化50周年、及び、商工クラブ設立40周年イベントを11月29日に実施した。11月24日からの上海来訪者5日間規制は、流入する感染を徹底的に抑え込み、感染の可能性の低い人が低い地域で活動することは、上海市が経済を維持するためではないかと筆者は考えている。



▲日中国交正常化50周年&商工クラブ設立40周年記念 イベント夕食会

今後の動向

今後の感染状況がどのようになるか筆者には分からないが、世界の趨勢がwithコロナとなっていく中で、中央政府関係者からゼロコロナ政策を見直しにつながるような発言もあった。また、中国国内の各国商会組織も中央政府に意見書を提出している。中国経済をこれ以上落ち込ませないためにも、早期の政策の見直しが望まれるが、来年の两会（全人代と全国政協会議）が終了するころまでは、全体には規制を緩和する方向にあると思うが、感染状況によって規制を強化したり、緩和したりしながら進むのではないだろうか。一つには中国では、各国で一般的となっているmRNAワクチンの自国での開発が遅れており、いまだに一般的ではないということもあろう。

なお、本稿を執筆している本日（12月5日）から、上海市では市内の公共交通機関（地下鉄・バスなど）で

は、健康码による 48 時間以内の PCR 陰性証明の提示を求めないことが昨日発表された。

<追記>

12月7日夜、上海市政府より、濃厚接触者の隔離を集中隔離から、条件を満たす場合には自宅隔離でOKとすること、また、市外から上海に入って来て5日以内の人の行動制限などについて、8日午前零時から緩和するとの措置が発表された。このように中国での政策は、発表翌日に適用するなど変化が早くその情報収集と対応については、常に気を付けていなければならない。

<追記 2>

12月12日現在、追記で記載した12月8日からの緩和措置による影響とは思えないスピードで上海市内においても感染が拡大している。既に、筆者の知り合い2名が9日と11日に抗原検査やPCR検査で陽性が判明。また、会員企業の中にも感染者が発生したと2社が報告してきた。現在は、陽性となっても無症状、軽症者は自宅で様子を見るようにとのことから、これまでの密接者、密接者の密接者まで追いかけて隔離するような方法はとらないことになり、感染に対しては自己防衛する以外に方法はなさそうである。この感染拡大は中国全土に広がっているようであり、特に、北京では8日からオフィスへの出勤の人数規制などもなくなったが、感染者が多くなり、自主的な在宅勤務が多いと聞いた。また、レストランや商店も閉めているところが多く、街が閑散となっているとの報道もされている。いよいよ中国も with コロナということになると、経済や市民生活への影響がいつまで続くことになるか不明である。

(上海日本商工クラブ 事務局長 中村 仁)

シンガポール建国記念行事を体験して（シンガポール）

シンガポールは1965年にマレーシア連邦から追い出される形で独立して、今年で建国57周年を迎えた。コロナ関連制限が徐々に解除されるなか、国をあげての建国記念行事も3年ぶりに大規模に開催された。建国記念のイベントは主に2つある。8月9日独立記念日に行われるNational Day Parade（祝賀式典）とその2週間後の日曜日である8月21日に行われるリー・シェンロン首相によるNational Day Rally（施政方針演説）である。3月に赴任した新参者として、シンガポールとシンガポール人への理解を深めるために、体験してみた（両方ともテレビ鑑賞ではあるが）。

まず、National Day Parade（祝賀式典）について

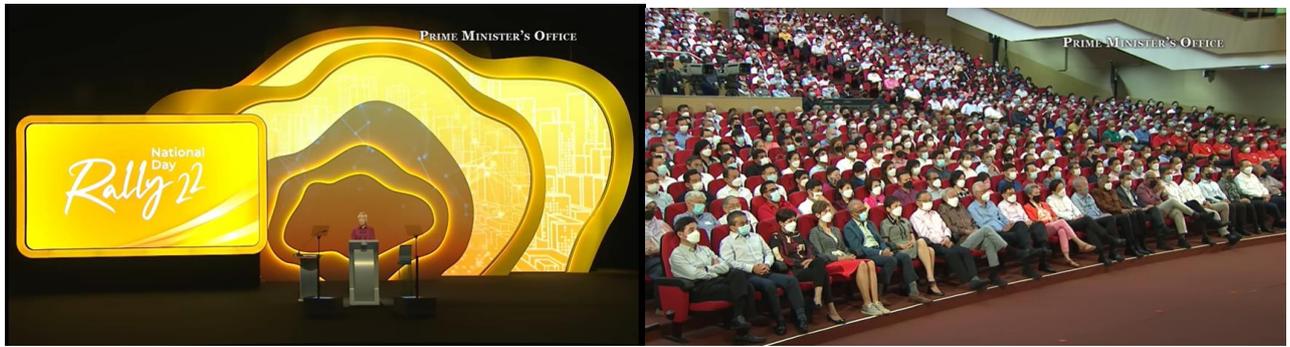


▲National day Parade をテレビ観賞（筆者撮影）

マーライオンやマリーナベイサンズなどが立地するベイエリアに設けられた大きな舞台と観客席がメイン会場となり、3時間に渡り、壮大な軍事パレードや航空ショー、各民族の歌や踊りのパフォーマンス、そして最後に、マリーナベイの煌びやかな景観を背景に展開される花火ショーを、事前の観覧抽選に当たった25,000人の国民（永住者含む）がヤコブ大統領、リー首相、国家議員の皆さんと一緒に楽しんだ。

当日は、シンガポール人の友人に誘われ、地元ルールに従い、国旗の色である赤と白の服を着て、会員制クラブのバーの大型スクリーンでテレビ中継を見ながら、シンガポール57歳の誕生日を祝った。バーのお客さんが一緒になって国歌を斉唱するシーンと、式典のテーマソング「Stronger Together! Majulah Singapura（マレー語：進め、シンガポール）！」がとても印象的だった。

そして、2週間後のNational Day Rally（施政方針演説）について



▲National Day Rally（首相府 HP より）

毎年、首相が国民に向けて、公用語の英語、マレー語、中国語で、国の課題、政策変更、経済発展の成果及び計画を発表する重要な演説である。祝賀式典の時に、友人に「建国の父、リー・クアンユーが始めた伝統だ。ぜひ聞いてください」と強く勧められたので、演説が始まる日曜日の夜7時前から、「同じ内容を3言語で話すより、英語に字幕を付けた方が効率いいのに。合理的なシンガポールらしくないなあ」とちょっと疑問を持ちながら、テレビの前で待機した。

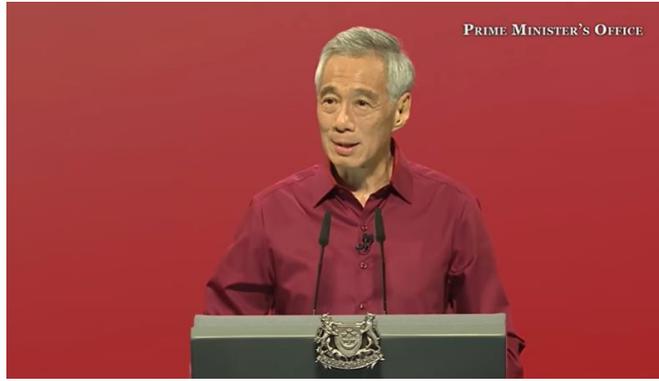
実際聞いてみると、時間を忘れてしまうほど聞き入ってしまった。それぞれの言語での演説は、かける時間も異なり、それぞれ違うポイントをおさえた内容となっていた。

まず、マレー語からスタートした。マレー・ムスリムの国民に向けた17分間のメッセージではコミュニティと人物の実例を加えながら、コロナとの戦いを振り返り、国民への感謝と称賛があふれた。

次に、21分間の中国語メッセージは、実に盛り沢山の内容だった。ブースターワクチン接種の呼びかけをしてから、「地政学的な挑戦」、「文化の継承」、「経済の挑戦」、三つのテーマで、人口の7割以上を占める中華系国民に訴えた。「力による統治への反対をはっきり表明しないと、小さな国であるシンガポールは侵略された場合は、誰も支持してくれなくなる」と、アセアンの中でいち早くロシアのウクライナ侵略を批判したシンガポールの立ち位置と考え方を説明。また、中華系国民は中国にルーツを持ちながら、シンガポールへ根付き、新たに文化の融合と創造に努めてきたことを評価。そして、昨今の生活費の上昇に対し、総額1億8,000万ドルに上る地域限定の商品券発行や高齢化社会へ対応するための消費税引き上げの理由を分かりやすく説明した。

そして最後に行われた1時間10分にわたる英語での演説は、ここ2年あまりのコロナ対応の総括からスタートし、世界の情勢（米中の緊張関係を中心に）、近々の法律改定（植民地時代から続く男性間の性交渉を違法としている刑法条項の撤廃を表明したと同時に、結婚は男女間のもとの憲法に明文化する方針を明らかに）から、今後数十年先の港湾・空港・公営住宅などの発展計画まで、未来に向けて、シンガポールのビジョンと夢を示し、国民に理解と信頼、団結と努力を求めた。

雄弁でありながら近所のおじいさんのような、優しい語り口で、強いリーダーシップを存分に発揮したリー首相。思わずファンになってしまった。



▲National Day Rally (首相府 HP より)

来年の8月も、この二つの記念行事を楽しみにしている。

(シンガポール商工会議所 事務局長 梁 瑜)